



名前がなくても、人は識別できるか

問題 自分を“固有名詞”を使わずに、他人と区別がつくように表現せよ。

問題の意味が少々難しいので、例を挙げてみよう。例えば、バラク・オバマ氏は、2010年時のアメリカ合衆国大統領と表現できる。アメリカは“固有名詞”なので「世界一のGDP国」と表現すればよい。さらに、アインシュタインだったら、相対性理論を発見した科学者と明確に一意だ。

例のような“有名人”の肩書きは非常にシンプルになるのだが、一般人はこうは行かない。「ABC会社の営業部の課長」という肩書は、ABC会社自体の説明が必要だ。また、課長は複数いる可能性があるので、〇〇県生まれや、囲碁の有段者などの特徴を付け加えなくてはならない。ここで、“昨日テニスをした”や“ここにいる”を使うと、文脈に依存してしまい、識別には向かない¹⁾。

以上は、意味が一意に決まった固有名詞や文脈依存の指示代名詞を使わずとも、一般名詞だけで、どれだけ多くの異なる対象を表現・識別できるかという言語問題であった。

名前とくに固有名詞は、非常に基本的な道具だが、有意文字でない限り意味を表さず、人間の記憶には不向きと言える。ある人の顔や役割などは思い出すことができても、名前だけがでてこなくなる経験

は誰にもあろう。さらに、人の名前でなくても、PCで作成したファイルは、“よい名前”でない限り、他人と共有したり、長期保存・参照することは難しい。

そこで、逆に名前なしですまそうという考えが有効となる。例えば、ファイルの例では、どのプロジェクトに属し、誰に送ったか、最近アクセスしたか等のファイルの“履歴書”が管理かつ検索できるようになれば、ファイル名や置き場所を覚える必要はなくなる。



また最近、あるサービスの広告において、「～～で検索」というフレーズが多く見られる。～～にはキーワードが入るのだが、検索エンジンにかけることで、名前やURLを覚えてもらわずとも、アクセスが可能だ。サービス名を「キーワード+検索方法」で代替している。

一般名詞の積み重ねだけでも、多くの対象を識別できるし、無理に名前を覚えなくても、履歴や検索で事足りるのである。

ところで、名前がないにも関わらず、日本人なら誰しもがよく知っている存在を一つ見つけた。

『吾輩は猫である。名前はまだない。』

(外園 康智)

1) 物事の性質の中で、どれはその物事に固有で、どれは偶然かを区別することは、それ自体で一つの哲学領域を作る位、奥が深い。